

編 集 後 記

今年の大きな出来事のひとつに、日本の三人の研究者のノーベル物理学賞の受賞がある。受賞者の喜びの声のなかで印象深かったのは、研究成果を上げるまでの道のりは遠く険しいものであったが、必ず成功すると信じて歩みを止めなかったという言葉である。

学問に近道はないということは、よく知られているはずの原理であろう。だが現在の研究環境には、性急に結果が求められるような大きな流れもそこにはらんでいるように感じられてならない。同時に一方では、われわれを取り巻く世界には、今日なお、戦争、テロ、貧困、災害、放射能汚染などの、人間の生存にかかわる重大な問題が未解決のまま残されている。研究活動は、それらの問題と全く無縁なものであってよいのかという根源的な問いかけにも、われわれは耳を傾けなければならないだろう。

しかし、研究活動は基本的に、外部にその成果や意味をもとめるものではないはずである。何より大事なのは、自分の内部に価値基準を持つこと、そして自分の定めたその価値を問いつづけ歩きつづけることだと思う。

本学の紀要である『星稜論苑』の43号の発刊にあたり、9名の研究者による10編の原稿を得た。それぞれの専門分野における研究の、それぞれの歩みに思いを馳せていただければ幸いである。

青木眞知子